

## マスタープラン・分析主義

都市づくりの時代、マスタープランとそれにもとづく分業的实施体制は、まさに正攻法であり定石であった。地域は、マスタープランを作成し、これにもとづきそれぞれの分野で各主体が何をするのか、役割と分担を具体的に定める。そして実施体制が組まれた。そこにマスタープランという全体計画重視と、効率的な執行のための分業体制が明晰に見てとれた。改めて考えるなら、そこには計画主体が計画したものは実現できるとの暗黙の了解がある。また計画者は、計画内容に関わることは全て予見でき、計画できるとの前提があった。これらが成り立つには、が、計画能力・権限、さらには実施権限と実施力をもっていなければならない。そしてそこでの計画主体は、通常は行政となる。要するに、第一に行政がそれらの力を公共の福祉の名のもとに委任されている必要がある。そして第二に確度高い計画策定が可能でなければならない。都市づくりの時代、旺盛な需要を背景に、行政はそれに見合う供給策を講じれば計画としての合理性は確保できた。

けれど地域創生の世界では、こうはならない。まず需要そのものが減少しているのだ。そのためには需要を創造するしかない。価値を創造し需要を呼び込む必要があるのだ。そしてその実施は、小さなことの積み重ねに要諦があり、個の自主自由や力量に委ねられる。個が尊重される。これが存分に発揮され、個と個が自在に結びつくことで価値が創造されていく必要がある。しかもそれは自己増殖を起こしていくことが望まれる。このように想定しなかった動きのなかにこそ、そのダイナミズムが生まれる。そこでは誰かが当初に全体を計画しつくすとの考えは頸木となる。それでは、当初に決めた通りにしかなっていかない。やってみなければ分からない。当初に考えたところを個による創造の積み重ねにより、超越するところに、地域創生の妙が生まれる。

(高村 義晴)